

〔研究ノート〕

大和文華館所蔵の金銅板仏について
—遼の可能性から—

近年における遼(契丹)の文物に関する資料の増加に伴い、唐時代とされてきた大和文華館所蔵の「金銅板仏」(図1・2)に認められる遼の特徴について改めて考察を行います。

本作品は鑄造による金銅板で、殿閣形の屋根を持ち、残り三辺を突線で囲むことから、仏像を安置する大殿が象られていると見られます。表面に尊像が半肉彫りであらわれ、背面には唐草風の植物が線刻されています。板の表面の四隅には「C」字形の突起が付き、底面には柄の残部と見られる突起が認められます。表面四隅の突起は扉を付けるための連結部の一部と推測され、本作品はもとは板状の厨子であったと考えられます。

本作品については、これまでに村田靖子氏による二編の論考があります(「大和文華館の唐時代金銅板仏について—宮殿形平厨子と千仏」『大和文華』109号、1993年、「中国の宮殿形板仏の新例—大和文華館蔵品に関連して」『大和文華』123号、2011年)。これらの論考では類品としてエルミタージュ美術館蔵品(図3、トゥルフアン出土、10×8.5cm、10世紀)と、背面の造りがやや異なる個人蔵品などが挙げられ、建築様式などを詳細に比較した検討が行われ、これらとの表現の相違から、

大和文華館所蔵品を唐時代の10世紀に、個人蔵品を遼の10から11世紀と結論付けられています。

先行研究を踏まえて作品の細部を確認していきます。まず、板表面の四隅にある突起部は板と同鑄ですが、先端部の状態から、上部が一部欠損していることがうかがえます。形状の近似する類品として挙げられる銅牌(図4、高25.9cm、幅18.5cm)では、四隅の突起は孔が開けられた環状であり、大和文華館所蔵品の「C」字形突起も、もとは環状であったと考えられます。図4は遼の領土であった内モンゴル自治区赤峰市野猪溝郷蓋家店村から出土しており、殿閣を象った銅版に尊像をあらわす形式、短い柄や突起などの構造が、類品の中で大和文華館所蔵品に最も近いといえます。他の類品も含めて、扉を伴う作例は今のところありませんが、扉の環状突起を重ねて棒を通して連結する構造の厨子であったと考えられます。

次に図像を見ると、本作品の表面は中央下方に大きく大日如来が表され、その周囲を取り囲むように小さな如来坐像が多数配されています。周囲の如来は計三〇体で、全て同じ姿勢で坐しています。大日如来は頭上に宝冠を戴き、智拳印を結ぶ金剛界大日如来の姿で、下から伸びる蓮台の上に坐しています。面相はやや腫

れぼったく、体軀も丸みを帯びます。本像の特徴として、頭光の両脇に、先端が三又に分かれて渦巻く雲の靈芝雲のようなものが伸びていること、宝冠から垂れる飾紐が肩の脇で大きな結び目をつくり下がるということが挙げられます。

同形の如来坐像を多数並置する表現は、「千(体)仏」を表すと考えられ、バーミヤン石窟では四世紀頃に、年代がやや下ると新疆や甘肅省の石窟にも見られます。「千(体)仏」は過去・現在・未来のうち現在に現れる千仏である「賢劫千仏」を指します。作例では博製の「千仏塼」(中国浙江省台州市 靈石寺塔天宮出土、甲戌歳(974)銘、26×20×厚3cm、黄岩区博物館蔵)や金銅製の「千仏板」(唐～五代十国時代、浙江省金華市万佛塔地宮出土、7.3×4.4cm、浙江省博物館)など江南で発見されるほか、先行研究で類品として挙げられた図3のように内陸のトゥルフアン出土品もあります。図3は表面に千仏のみが合計三〇体陽鑄され、興味深いことに、如来の数は大和文華館所蔵品と共通します。また、四隅に扉との連結部の痕と見られる突起が認められます。制作地は断定できませんが、トゥルフアン出土文書には契丹文字も含まれ、遼の文物がもたらされていたことを考慮すると、遼である可能性も考えられます。

大日如来の図像については、ほぼ同図像の大日如来像が「石造五重舍利塔」(西安僑盛公司所蔵)に認められます(図5)。八角形を呈する舍利塔塔身の一面に大日如来が半肉彫りで表されま

す。宝冠を戴き智拳印を結ぶ姿で、下から伸びる蓮台に坐しています。さらに、頭上より三又に分けて渦巻く雲のようなものが左右に分かれて伸び、先端で枝分かれ、宝冠から垂れる飾紐が肩の脇で結び目を作り、大和文華館所蔵品(図2)で認められた特徴を有する図像といえます。これらに見られる飾紐の結び目は、金申氏も既に指摘されているように、遼の金銅仏や經典にあらわされた菩薩などに認められる要素です。従って、大和文華館所蔵品は遼の特徴を色濃くあらわしていると言えます。大日如来の周囲の千仏との組み合わせについては、遼の仏塔などにあらわされた尊像の構成と照合させることが必要ですが、遼における釈迦信仰の隆盛、また、朝陽北塔や慶州白塔(釈迦如来仏舍利塔)に見られるように大日如来と過去七仏との組み合わせが流行していたことを鑑みれば、千仏は過去七仏を象徴とする図像として大日如来とともにあらわされたと考えられるのではないのでしょうか。図像については、遼仏教の特徴を反映するものと見られますが、類品とともに更に考察を進める必要があります。

(図3は『大和文華』109号、1993年、図4は『遼上京文物瑣英』遼方出版社、2005年、図5は金申「海外回流的五重舍利宝塔的内容和制作年代」『金申趣談古代仏像』紫禁城出版社、2009年より転載させていただきます。瀧朝子)

図1 表面



図2 部分図



図3 表面



図4 表面



図5 部分図



季刊 美のたより No.188

平成26年10月31日

発行 大和文華館